

眞辟葛

ク漆葉又ハゼウルシノ葉ノ如シ、其嫩葉ノ三葉ナル者ト大ニ異ナリ、秋ニ至テ紅葉スルコト亦漆葉ノ如シ、故ニツタウルシ、ヤマウルシ等ノ名アリ、

〔書言字考節用集生六〕

〔書言字考節用集生六〕植 薜荔マサキカヅラ 本名木蓮、本草、四時不凋、厚葉、木饅頭、眞辟葛古語

木饅頭

眞辟葛古語

〔倭訓栞前編 二十九〕

末 まさきのかづら

古語拾遺に眞辟葛と書り、古事記に天之眞拆と見ゆ、され

ど眞榮の義なるべし、常葉に榮ゆる葛也、神事に専ら用るは、眞幸の義とも取れるなり、延喜式に

眞辟葛古語

眞前葛と見え、日本紀の歌にまさきづらとよみ、万葉集に冬薯蕷葛又冬薯蕷都良とも書り、いや

常玄きにとも尋てゆければともつゞけるは、常磐に長くはひ續くをいふなり、薜荔也といへれど、薜荔はいたび也、杜仲マサキの葉に似て小に蔓生するもの一種ありて、蔓甚長く、皮中に木綿あり、是也といへり、仙覺はさねかづらと訓じたれど、古今六帖に、まさきかづらとて、右の萬葉の歌入たり、

〔冠辭考九〕まさきづら略○中

眞さきづらの事は、万葉にいや常しきにとよみ、冬薯蕷とも書つれば、常に榮る葛なるは、是るし、さてその常葉なる故に眞榮葛マサキカヅラと云を、略きてまさきづらとはいふ也、かの眞さか木てふも眞榮樹の意なるを思ふべし、何となれば古へ神事にも公事にも、言あげするには、常磐に堅磐カサになど讚稱カサる物多し、そのをりは木をかづらをも常葉なるをもてすめれば、そをほめた、へて眞榮樹といひ、眞榮葛とはいへる也、且神社によりて松杉榿などをさか木といひて、一種ならぬをおもふに、かづらも常葉なるをば、すべて眞榮づらといふべし、然ればいと古へはまさきかづらも神社によりて用ゐなれしは、さまざま有べきが中に、一つによりていはゞ、その常葉なるさか木が中にかの鏡幣をかけ、鬘華にさしなどせしは、榿なる據あり、是が如くまさきかづらといふ中に、櫛とし鬘とせしは一種有つらんかし、そのよしは古今集に、み山にはあられふるらし、外山な